

『罪と罰』のイタリック

池田和彦

ボードアンド・クルトネがティレを「女性用の記号」と呼んで嫌ったのに続き、J. B. シチュールバはティレやイタリックによる強調が女性によく書いた日記や書簡から文学にとり入れられたものと考え、これらの記号の使用を非論理的で思想表現上の怠惰の印とみなしたという。¹そこまで言わずとも、イタリックやティレの安易な多用が一般に趣味の悪い印象を与えることは否めない。ところで、ドストエフスキイの傍点（すなわち原文のイタリック）には注意すべきだ、と説いたのは「『罪と罰』について」の小林秀雄であった。²実際、『罪と罰』にはイタリックが約250か所にわたり使われていて、³場所によっては子供じみた使い方と見られかねないところもある。しかし、小林の指摘どおり仔細に見れば、イタリックは様々な機能を担ってテキストを表情豊かなものになっている。本稿ではその働きを具体例に即して見ながら、イタリックが総体として作品のなかでどのような役割をはたしているか考えてみたい。

*

*

イタリックは通常、書物や雑誌、船などの名や外国語の語句に用いられるほか、注意、強調を示すために用いられる。こうした用例はもちろん後述するように『罪と罰』にも見られ、この作品のイタリックの大半もせんじつめれば強調し、読者の注意を促すためのものといえる。しかしさらに注意すると、そこにはテキスト読解の指針となる種々の工夫が凝らされていることに気づく。

たとえば物語を読みはじめたまず次々に登場してくるのは、次のような代名詞のイタリックである。

- (1) 《 Разве я способен на это? Разве это серьезно? 》 (6) (下線のある語が原文のイタリック。я やонは断りのない限りラスコーリニコフを指す。以下同じ。)
- (2) 《 И тогда, стало быть, так же будет солнце светить!.. 》 (8)
- (3) 《 После того, — вскрикнул он, срываясь со скамейки, — да разве то будет? 》 (45)

老婆殺しにまつわる事柄が説明もないままイタリックで示されるため、読者には謎めいた印象を与える。それは下の例に見られるように、ラスコーリニコフの犯行後も変わらない。

- (4) 《 Дойдя до поворота вовчерашнюю улицу, он с мучительною тревогою заглянул в нее , на тот дом ... 》 (74)
- (5) 《 что к нему после того на другой день пойду, ну что ж, и пойду! 》 (87)

犯行にかかわる事柄に対するイタリックの執拗な反復は、グラフィックな視覚的効果によってたえず老婆殺しを現前させ、テキストに緊迫感をもたらさずにおかない。同時にそれは、たえず事件を意識してあらゆることに敏感になるラスコーリニコフの

内面の緊張、苛だちの表現にもなっている。そのことは、ラズミーヒンとポリフィリイの会話に挿入された次のイタリックによく表われている。

(6) 《 Да ты разве знал, что и он там закладывал? — крикнул Размихин.

Порфирий Петрович прямо обратился к Раскольникову:

—Ваши обе вещи, кольцо и часы, были у ней под одну бумажку завернуты,》

(194) (там, у нейは金貸しの老婆のところを指す)

「ラズミーヒンは叫んだ」と書かれているので、тамのイタリックは彼が語気を強めて言ったことを示す可能性もあろう。しかし、ポリフィリイがтамだけ語気を強める不自然な話し方をしたとは考えにくい。むしろ二人の語調にかかわりなく、書き手が登場人物の頭ごしにイタリックを介在させたと考えられる。すなわちイタリックはそれらの語が、同席するラスコーリニコフの耳を鋭く突いたことを視覚的に示していると映るのである。

上の例を含めてここで『罪と罰』の主なイタリックの用法を整理すれば、以下のようものがあげられよう。

(1)話者の意図を暗黙のうちに示し、読者の理解を助ける。(2)登場人に対する話者の皮肉な視線を示す。(3)強調を示す。a)緊張を高める。b)同義語の強調 c)話者、登場人物のいずれによるともとれる強調。(4)言葉そのものの面白さを示す。(5)同時代の社会的コンテクストからとられた言葉を示す。(6)登場人物の発話を模写的に伝える。(7)他の特徴的な用法。(8)目的が不明なもの。

(1)(2)(3)のように互いに重なるものもあり、分類はあくまで便宜的な面をもつが、⁴以下(1)の用法から順に見ていきたい。

(1) 話者の意図を暗黙のうちに示す用法

この用法の典型的な例は、ドゥーニャの結婚話を母親の手紙で知らされたラスコーリニコフが、母親が表だって語らぬルージンの人柄を見抜く次の一文に見られる。

(7) 《 Авдотья Романовна, (...), „ кажется, доброго“, как замечает сама Дунечка. Это кажется всего великолепнее! 》 (35)

(8) 《 мамаше он показался резок, немножко, 》 (36) (он はルージンを指す)

(9) 《 Ведь тут что важно: тут не скупость, не скалдырничество важно, а тон всего этого. 》 (6)

手紙には、末尾の《 до свиданя 》のほかイタリックは一カ所しか使われていない。⁵そのノッペラとしたテキストが隠しもつ意味をラスコーリニコフの皮肉な視線があらばいていくのが、イタリックによってきわだたされている。無表情な手紙のテキストと、あとに続く彼の独白のめりはりに富んだイタリックの多用の対比が面白く、イタリックの意識的な使用がよくうかがえる箇所である。われわれは後のルージンの登場のさいに、これらのイタリックが彼の卑しい人柄を十二分に語っていることに気づかされる。イタリックは手紙の言葉の引用であることを示すに止まらず、語り手が説明

的な言葉を労する煩しさを省く暗黙の解説となっているのである。

同様の例は、ソーニャがラザロの復活を読みあげる次の一節にも見られる。

(10) 《 Сестра умершего Марфа говорит ему: господи! уже смердит; ибо четыре дни, как он во гробе. 》

Она энергично ударила на слово: четыре.

(...) Лазарь! или вон. И вышел умерший, 》 (251)

4という数字を力をこめて読んだと書かれているので、上のイタリックはそのことを示す(6)にあげた摸写的な用法にも属する。しかし、ラスコーリニコフが第3部第3章に語られたように棺桶のような部屋で犯行後3日間意識を失い、4日目に覚醒して再生への道を歩みだしたというラザロの復活に重なる設定がなされていたことを思えば、《четыре》らのイタリックは、ここでも物語の進行の道標となる暗黙のシグナルになっていることに気づかされよう。

(2) 登場人物への皮肉な視線を示すイタリック

物語読解のガイドとなる働きは、語り手の登場人物に対する皮肉な視線を示す次の例にも見られる。

(11) 《 то Ньютон имел бы право, и даже был обязан...устранить этих десять или сто человек, чтобы сделать известными свои открытия всему человечеству. 》 (199)

(12) 《 Она именно состоит в том, что люди, по закону природы, разделяются вообще на два разряда: (...), то есть имеющих дар или талант сказать в среде своей новое слово. 》 (200) (Она はラスコーリニコフの超人思想の мысль を指す)

ラスコーリニコフがポリフィリイに自分の超人思想を語る一節である。12では人間を凡庸な素材的種族と天才に二分して怪しまぬ彼の歪んだ精神の滑稽さが、《вообще》のイタリックによって浮き彫りにされ、背後に語り手の皮肉な視線の存在を感じさせる。《новое слово》のイタリックも同じで、超人思想を暗に「新しき言葉」に擬して語る彼の思いあがり、グラフィックに皮肉られている。11の《устранить》も事物に用うべき語を人間に適用するラスコーリニコフの思考の歪みを強調し、彼の病の所在を読者に示唆している。

似たような例は、小説の終り近くの次の一節にも見られる。

(13) 《 Он остановился на мгновение, чтобы перевести дух, чтобы оправиться, чтобы войти человеком. 》 (406)

(14) 《 Но теперь, уже в остроге, на свободе, он вновь обсудил и обдумал все прежние свои поступки... 》 (417)

13は自首しにきたラスコーニコフが警察署に入る直前の動作を描いた一文である。

自首にあたり、せめて人間としての矜持を保っていたいという気持ちは理解できなくはない。しかし彼が前述のような超人思想をいだき、老婆や超人たりえぬ自分をしばしば虫けら、シラミ呼ばわりしていたことを思うと、《человек》のイタリックも、超人たるべき自分に執着する彼の抜きがたい傲慢さを皮肉ったものと映る。彼自身そうした自分の滑稽さにおぼろげに気づいていたことは、上の一文のあとに続く「『しかしなんのために。どうして』と、突然彼は自分のふるまいの意味を考えて思った。」(406)という言葉にうかがえるとおりである。

14は監獄に入ってやっと自由を感じるラスコーリニコフの心理の逆説をイタリックで強調したもので、以前ポリフィリイが説いた平安(349)が確かに実現したことを考えると、ここでも書き手の皮肉な視線が見てとれる。ラスコーリニコフが獲得した自由が、金銭によってではなく罪の告白によるものであったことは、このイタリックが物語の主題と密接にかかわるものであると感じさせる。H. ヴァインリッヒはイタリックを反語(イロニー)表現が伴う反語信号(イロニー・シグナル)の一つとしているが、⁶この種のイタリックは(1)の用法同様、語り手の評価を示す指標となつて、作者のテキストへの無言の介入がなされるのである。

(3) 強調のイタリック

はじめに述べたようにイタリックは大半が何らかの強調を行なっているが、『罪と罰』にはいくつか特徴的な働きをする強調がある。

(a) 緊迫感を高めるもの

老婆殺しにまつわる代名詞のイタリックが、物語の緊張を高めていることは冒頭でふれた。似たように、意味の伝達よりもイタリックを多用することによって緊迫感を与える用法は、ソーニャがラザロの復活を読む先の場面にも見られる。

(15) 《 и именно ему, чтоб он слышал, и неприменно теперь — 》(250)

(16) 《 Она было остановилась, быстро подняла было на него глаза, 》(250)

(15 のему, онはラスコーリニコフを, 16のона はソーニャを指す)

この場面にはイタリックが11カ所と頻出するが、その多くは上の例と同様、イタリックによって何か特別の意味が伝えられるわけではない。しかし、安っぽく稚拙な印象を与えるのをいとわずあえてそうしたのは、テキストを視覚的に立体化、激化し、一場の緊迫感をあくまで盛りたてようとしたためと考えられる。

(b) 同義語の一貫した強調

一方、強調のなかには同義の言葉に一貫してイタリックを用いる次のような例もある。

(17) 《 Он ведь знал, он предчувствовал, что она непременно 《пронесется》, и уже ждал ее; 》(39) (она, еёは老婆殺しにまつわるмысль を指す)

(18) 《 Я это должен был знать, — думал он с горькою усмешкой, — и как смел я, зная себя, предчувствуя себя, брать топор и кровавиться! 》(210)

(19) 《 — потому что сам-то я, может быть, еще сквернее и гаже, чем убитая вошь, и заранее предчувствовал, что скажу себе это уж после того, как убью! 》 (211)

物語ではラスコーリニコフの犯行への歩みが「超自然的な力によってうむを言わさず引っぱられだすように」(58)、「あたかも機械の歯車に服の端をはさまれ、引きこまれはじめるように」(58)と、運命的なものだったかのように語られている。例文の3つの予感に対するイタリックは、この運命性を強調することによってその背後に神の存在を感じさせる効果をあげている。F.モーリアックらのキリスト教小説の技法としていわれる、神の光が背後から射すのを暗示するのと似た働きをするのである。

(C) 強調主の不明なイタリック

『罪と罰』の強調のイタリックで特徴的なのは、次のようにそれが登場人物によるものか語り手によるものか、決めかねる例が見られることである。

(20) 《 Действительно же новых они в то же время весьма часто не замечают ... 》 (201) (ラスコーリニコフの言葉。они は普通の人々を指す)

(21) 《 но что действительно оригинально во всем этом, — и действительно принадлежит одному тебе, к моему ужасу, — это то, что все-таки кровь по совести разрешаешь, 》 (202) (ラズミーヒンの言葉, тебе はラスコーリニコフを指す。)

例文12でもふれたが、20はラスコーリニコフがポリフィリイに自分の超人思想を説明している場面である。しかし、《новых》のイタリックはラスコーリニコフが強調したことを示しているのか、あるいは彼が自分の思想を「新しき言葉」と思いこんでいる気負いへの皮肉なのか、判然としない。その曖昧さ、両義性をドストエフスキイが意図的に利用しているとも見える。21の《оригинально》も同様で、ラズミーヒンの言葉の強調を模写的に示したとも、ラスコーリニコフの歪んだ考えを彼が「独創的」と述べるのを揶揄した印ともとれる。両者とも語り手の皮肉な視線が含意されている点は同じで、イタリックはやはり書き手が登場人物の頭ごしに読者に送るシグナルの性格をもち、語り手が叙述の表面に顔を出さぬ『罪と罰』の暗黙の作者介入の手段となっている。

(4) 言葉の面白さを示す (5) 社会的コンテキストからとられた言葉のイタリック
『罪と罰』には言葉自体の面白さを強調するイタリックもある。例文11の人に用いた《устранить》はその一例であったが、他にも次のような類例が見られる。

(22) 《 мало того: и дело-то своего, пропагандного, может, не знает порядочно, потому что-то уже слишком сбивается, 》 (280) (А. Семионовичの言葉)

(23) 《 если Андрей Семенович приписывал ему готовность способствовать будущему и скорому устройству новой 《 коммуны》 где-нибудь в Мещанской улице; 》 (280) (同上。ему はルージンを指す)

ともに外来語である点はイタリックの本来の用法に則ったものといえるが、不消化のまま流行の思想にかぶれるA. セミョーノヴィチの滑稽さが、外来語という言葉の異質性とイタリックによってきわだたされている。《 коммуны》は、《 》に入れられているように同時代のダーリの辞書に記載のないネオロジスムで、この語が口にされた背景に『何をなすべきか』に代表されるコミュン運動の流行があったことはいうまでもない。社会的なコンテキストからとり入れられた言葉をイタリックにする例は、A. セミョーノヴィチが使う次の《 полезно》にも認められる。

(24) 《 Все, что полезно человечеству, то и благородно! Я понимаю только одно слово: полезное! 》 (285)(同上。)

《 полезно》も当時の功利論者のキーワードであり、イタリックは流行思想をオウム返しにする滑稽さをやはり視覚的に強調している。時代の紋切型の言葉を皮肉るイタリックは、フロベールが『ボヴァリー夫人』で多用した用法として知られているが、⁷この種のイタリックが物語の時代的な真実らしさを補強する役割をはたしていることも見逃せない。

(6) 登場人物の発話模写的に伝えるイタリック

『罪と罰』に頻出するイタリックには、さらに登場人物の発話を模写的に伝えるイタリックがある。ソーニャがラザロの復活を読む先の例10の《 четыре》はその典型で、ときに《 упереть, упира́ть》(257・288)などの言葉をともなって強く、あるいは大きな声で発せられたことが言われる。視覚的な強調を通して登場人物の肉声を如実に響かせる用法である。この種の用法を多用しているのも、『罪と罰』の文体の一つの特徴である。

(7) 他の特徴的な用例

次にこれまでの分類でふれられなかった面白い用例を二つ紹介しておきたい。一つは下のещёのように、同じ語をくり返しイタリックにして並べた例である。

(25) 《 Я, может, на себяеще наклепал, — мрачно заметил он, как бы в задумчивости, — может, я еще человек, а не вошь и поторопился себя осудить ... Я еще поборюсь. 》 (323)

三度くり返されたещёはラスコーリニコフの虚栄心の根強さを強調するとともに、力みかえった反復が滑稽味をかもす。子供じみた反復と見られかねないが、ドストエフスキイの意識的な使い方がよく表われている例である。もう一つは、ポリフィリイがラスコーリニコフを名指して殺人者呼ばわりする次の例である。

(26) 《 Так... кто же ... убил?... — спросил он, не выдержав, задышающимся голосом. (...)

(...)— да вы убили, Родион Романыч! Вы и убили-с... — прибавил он почти шептом, » (323) (3行目のонはポリフィリイを指す。)

例文6のтамと同様、выのイタリックはポリフィリイが強く言ったと同時に、ラスコーリニコフの耳を鋭く突いたことを示す。それは、キリストを売ったユダが「まさか私ではないでしょう。」と問うたのに対し、イエスが「いやあなただ。」と答えた聖書のエピソード(マタイ伝26章25節)を思わす対話になっている。またこの《вы》はラスコーリニコフが路上で見知らぬ男に言われた《ты убийца》(209)の反復でもあり、『罪と罰』に現われる様々なレヴェルの反復の一つとなっている。

(8) 目的の不明なイタリック

ところで、『罪と罰』のなかにはなぜイタリックにされたか理由の不明な例も見られる。たとえば例文10で引用した一節に頻出する次のようなイタリック。

(27) 《 Нет, те люди не так сделаны; настоящий властелин, кому всё разрешается, громит Тулон, делает резню в Париже, забывает армию в Египте, тратит полмиллиона людей в московском походе и отделяется каланбуром в Вильне; и ему же, по смерти, ставят кумиры, — а стало быть, и всё разрешается. » (211)

《тратить》に関連して以前に述べたように、これらは全体として超人思想をいだくラスコーリニコフの傲慢さを強調し、こうした考えに固執しているのを皮肉っていると考えられる。しかし、ソーニャがラザロの復活を読む場面同様、個々の意味を問わぬとしても、これほどイタリックを並べる必要があったのかという疑問は消せない。イタリックが単独で登場する場所でも、やはり意図の不明な例がある。

(28) 《 Припоминая, вчерне, в общей связи, всю свою давешнюю сцену с Порфирием, он не мог еще раз содрогнуться от ужаса. » (273)

第4部第6章、ポリフィリイとの対決であやうく犯行を暴かれそうになったラスコーリニコフがミコールの自首によって窮地を逃れ、下宿に戻って警察署での会話を反芻する場面である。恐怖にふるえるラスコーリニコフへの皮肉なのか、彼の緊張の表現なのか、何らかの強調としても《вчерне》をイタリックで示す必要があったのか不可解である。

(9) イタリックの登場しない箇所

そこで上の疑問に対する直接の答えにはならないが、少し角度を変えて、イタリックの登場しない場所から逆にその登場の仕方を考えてみたい。『罪と罰』でイタリック

クがほとんど出てこなくなる場面には、たとえば次のような箇所がある。

1. ラスコーリニコフと金貸の老婆の会話や、居酒屋でのマルメラードフとの会話の場面（第1部1~2章）。
2. ラスコーリニコフの部屋でのラズミーヒンやルージンとの会話や、酒場でのザミャートフとの対話の場面（第2部5~6章）。
3. マルメラードフが死ぬ場面（第2部7章）や、ラスコーリニコフの部屋へ母親やドゥーニャが訪れる場面（第3部1章）。
4. スヴィドリガイロフの最初のラスコーリニコフ訪問の場面（第4部1章）。
5. ソーニャが泥棒呼ばわりされて騒ぎになる場面や、カテリーナと子供の橋上での踊りの場面（第5部3.5章）。
6. スヴィドリガイロフとラスコーリニコフ、ドゥーニャの対話の場面や、彼の自殺までの彷徨の場面（第6部3~6章）。

これらから気づかされるのは、イタリックの現われない場所の多くが、(1)マルメラードフの死や彼の追善供養での騒ぎを描く場面のように、ラスコーリニコフのほか複数の人物からなる場面、あるいはスヴィドリガイロフとドゥーニャの密会のようなラスコーリニコフのいない場面であること、(2)語りの焦点がラスコーリニコフを離れ、彼は他の人物のなかの一人に後退して距離をとって描かれる場面であること、である。劇的、動的な場面が多いのも特徴的だが、ルージンやスヴィドリガイロフがラスコーリニコフの部屋に訪れる場面のような小人数の静的な場面でも、上のような描き方の場合イタリックはごく少なくなる。第2部第6章のザミャートフとの対話の場面のよう、話題が老婆殺しにふれても同じで、語り手のラスコーリニコフに対する距離の遠近がイタリックの使用を決める大きな条件であることに気づかされる。そのことは、たとえば警察署でのポリフィリイとの対決を描くラスコーリニコフに焦点をおきたいいわゆる「語ること」(telling)の場面から（第4部5~6章）、上の(2)の形式をとる「示すこと」(showing)の叙述によるマルメラードフの追善供養へ移るとイタリックが少なくなり（第5部2.3章）、⁹その後ソーニャの家へ向かうラスコーリニコフに焦点が戻って彼の心中を語りはじめると、またイタリックが現われてくる例などでよく確認できる（第5部第4章）。『罪と罰』ではラスコーリニコフに焦点をあてた緊張した叙述と、複数の人物が登場する彼から距離をとった叙述の二様の叙述の交代と並行して、イタリックも一種の緊緩のリズムをもって登場、退場をくり返すのである。

(10) まとめ

さて最後に『罪と罰』に特徴的なイタリックの用法を考え、この小説のイタリックの動きをまとめてみたい。そのために以前の作品のイタリックを概観しておけば、およそ次のようなことがいえる。

註9に示したように、初期のドストエフスキイにおいては『貧しき人々』7『分身』9をはじめとして、『女あるじ』7『ポルズンコフ』6『弱い心』4『白夜』5『小英雄』4例等と、イタリックの使用はごく限られている。⁹流刑前の作品では『ネートチカ・ネズワーノフ』に46例と比較的多く、ネートチカが見つめるアレクサンドラ・ミハイロヴナの昔の恋人の手紙などにイタリックの意識的な用例が見られるもの(2-240~

244)、¹⁰大半は思わせぶりの強調や皮肉等の通常の用法に限られている。一方、流刑後の作品では『おじの夢』(26例)や『ステパンチコヴォ村とその住人』(58例)にかなり頻出し、特に後者には登場人物によるのか書き手によるのかはっきりしないイタリックや意図不明のイタリックなど、特徴的な用例が多少登場してくる。¹¹60年代以降では『虐げられた人々』157『死の家の記録』71と数が増し、『冬記夏象』や『地下室の手記』にも23、52例と頻出する。しかし多くは強調、皮肉、人の言葉の引用や外来語などで、一般的な用法を超えていない。それではそれらと比べて、どのような例が『罪と罰』の独自の用法といえるだろうか。

『罪と罰』にあって以前の作品にほとんど見られぬイタリックには、(1)の読者の物語理解を助ける語り手の目配せ的なイタリック、(3)のCの登場人物か語り手によるのか曖昧なイタリック、(8)の意図不明のイタリック、などがあげられる。そして、そのようなイタリックが登場するのには、『罪と罰』が物語に直接顔をださぬ無人称的な語り手による客観小説として書かれていることが密接に関係している。すなわち、イタリックがふえる60年代の前記4作や『ネートチカ・ネズワーノワ』『ステパンチコヴォ村とその住人』等は、いずれも作中人物の一人が語る一人称小説であったため、イタリックの使用をほぼ登場人物たる語り手に帰すことができ、用法も『地下室の手記』に典型的に見られるように、語り手の皮肉や強調を示すために曖昧さは見られない。これに対して『罪と罰』では、物語に姿を現わさぬ話者が作者の意図を体して暗黙のうちに様々なシグナルを発するため、それまでのイタリックにない微妙なニュアンスが生まれたと考えられる。これは『罪と罰』の語り手が作者の立場に近い信頼できる話者であったために可能になったことで、『白痴』のように信頼できると限らぬ話者の場合、¹²この種のイタリックはほとんど登場してこない。『罪と罰』の語り手はそれだけ統一的な性格を備えた存在になっており、われわれはイタリックを通して顔を見せぬ語り手の皮肉な性格をうかがうことができる。そして登場人物の発話に用いられた場合同様、イタリックはときに語り手の抑制された声音や目配せをも髣髴とさせる。¹³

イタリックにはまた(5)の例で見たように、小説外の社会的コンテキストをテキスト内にとりこんで物語の時代的な真実らしさを補強し、あるいは登場人物の発話を再現して叙述の真実らしさを支える働きがある。しかし、老婆殺しにまつわる事ごらを指す代名詞のイタリックに見られたように、その頻出は、語り手が小説から姿を消し能う限り言葉を透明化して、物語が言語による構築物であることを読者に忘却させることをめざすリアリズム小説のテキストに、たえず書き手や均質でない言葉の存在を意識させる反リアリズム的な働きをする。¹⁴ドストエフスキイが無人称的なリアリズム小説のイリュージョニズムを志向しなかったことは『白痴』以降の長編にみられるとおりで、その姿勢はすでにイタリックの使い方にも表われていたといえる。

ところで『罪と罰』のイタリックは、バフチンのいうドストエフスキイのいわゆるポリフォニックな文体と何らかの関連があるだろうか。この点についてまだ十分な答えを得ていないが、試みにヒントになることを記せば、たとえば彼は『ドストエフスキイの詩学の諸問題』のなかで次のように述べている。

《しかし、作者は他人の言葉を自分の目的のために利用できる。しかも、すでに独自の志向をもった言葉にそれを失なわせずに新たな意味を含ませるという仕方で。》

15

パロディや様式化された語りの言葉について語った上の言葉は、ラスコーリニコフやレフチェンコの直接話法の中に挿入された皮肉なイタリックにも当てはまることに気づかされる。前述のようにH. ヴァインリッヒはイタリックを反語（イロニー）表現が伴う反語信号（イロニー・シグナル）の一つとしたが、この種のイタリックは登場人物が無意識に述べている言葉を別の方向に向かわせていることの指標、読者に対する一種のサインといえる。そのためイタリックの度重なる登場は、しだいに読者がイタリックに出会うたびにその意味を斟酌していくように働いていく。

バフチンはまた『マルクス主義と言語哲学』のなかで次のように言う。

《間接話法のなかに導入されながらもみずからの特性が感知されうる他者の言葉や表現は（ことにそれらが引用符のなかにふくめられているばあい）、フォルマリストたちのことばをもちいるならば、「異化されており」、それも著者にとって必要な方向で異化されている。すなわち、それらの語や表現は物化され、それらの彩りの豊かさが強められるが、それと同時に、著者の態度——皮肉、ユーモア等——のトーンが重ねあわされている。》¹⁶

このことは間接話法、すなわち語り手の地の文のなかでイタリックにされた他者の言葉についてもいえて、イタリックはいわば上の引用符の役割をはたしている。直接話法、間接話法のいずれの場合も他者の肉声を如実に響かせ、あるいは意味をずらし、独自のニュアンスを与える働きをするのである。

さて以上見てきたように、『罪と罰』ではイタリックが様々なニュアンスをもって多様な使い方をされている。老婆殺しにまつわる代名詞のイタリックのように以前の作品に類例の見られるものもあるが、¹⁷この作品ほど全体にわたって組織的、方法的に利用された例はない。しいて言えば、『地下室の手記』のイタリックの多用と『ステパンチコヴォ村とその住人』にときおり見られた独自の用法を発展させたのが、

『罪と罰』のイタリックと位置づけられようか。そこにうかがえるのは語り手の、ひいては暗黙の道標を示して読者を意図する方向へ導こうとするドストエフスキイの強固なテキスト管理の意志である。すなわちイタリックは作者がテキストへ直接の介入するのを避けながら、なお陰の声を響かせ、読者とはすかいの対話を試みる有効な手段となっている。たとえばドストエフスキイがこの小説をラスコーリニコフの一人称の語りで書きはじめながら、後にこれを断念したのも、同じ一人称形式の『地下室の手記』で検閲のせいなどもあって小説の背後にキリスト教的光の射すのを示すことに失敗した彼が、¹⁸同じ失敗を犯すことを危ぶんだのも理由の一つではなかったろうか。『地下室の手記』ではもっぱら語り手の「私」の意図の表現手段であったイタリックが、『罪と罰』では登場人物の頭ごしに使われる作者の表現手段となったのも、そうした配慮が働いたためと考えられる。¹⁹そのような点で『罪と罰』のテキストは、読者の判断に委ねるところの多い書き方がされた『白痴』とよい対照をみせている。²⁰

(註)

- (1) Л.Гинзбург. Человек за письменным столом. Л.,1989. с.13.
- (2) 小林秀雄全集. 第6巻. 新潮社. 昭和53年. pp.240-241.
- (3) 本論では語句の長さに関係なく、切れめなく連続して使われているイタリックの部分を一か所として数える。なお30巻本アカデミヤ版ドストエフスキイ全集の参照頁は『罪と罰』については頁数のみ、他の巻については(巻数-頁数)で本文中に示す。
- (4) たとえば(2)は(1)の一部をなすともいえ、また老婆殺しにまつわる言葉のイタリックには(2)や(3)のaの働きがあると考えられよう。
- (5) 33頁の《наверно》がイタリック。
- (6) Н. ヴァインリヒ. 『うその言語学』. 井口省吾訳. 1973. p.106.
- (7) А.チボーデ. 『フローベール論』. 戸田信吉訳. 1966. pp.243-245.
 М.バルガス=リヨサ. 『果てしなき饗宴』. 工藤庸子訳. 1988. pp.232-238.
 木之下忠敬. 「Flaubert作品における《italiques》の意味」. 『フランス語フランス文学研究』. No.31.1977.
 Claude Duchet. Signifiante et in-signifiante: Le discours italique dans Madame Bovary. 《La Production du sens chez Flaubert》 (Direction. Claudine Gothot-Mersch). Paris., 1975.
 Claude Duchet. Discours social et texte italique dans Madame Bovary. 《Langage de Flaubert》 (Actes du colloque de London (Canada) 1973). Paris., 1976.
 Claudine Gothot-Mersch. La parole des personnages. 《Travail de Flaubert》 (Direction. G.Genette et T.Todorov). Paris., 1983.
 なお旧ソ連ではたとえばЛ.Гинзбургに下記の小論がある。
 Об одном Пушкинском курсиве. в кн. О старом и новом. Л., 1982.
 いずれも本稿を書くにあたり参考にした。
- (8) 「語ること」(telling)とは、フィールディングやロレンス・スターンに代表される作者やその代弁者が直接に物語に姿を現して語る叙述の形式のこと。「示すこと」(showing)とは、フロベール以後の語り手が表にでずに客観的、非個人的に場面を提示して描く方法のこと。これについては、下記を参照。
 W.C.ブース『フィクションの修辞学』(服部典之. 他訳).1991.第1章.

(9)

題名	頁	個数	率	題名	頁	個数	率
貧しき人々	97	7	0.07	ネートチカ・ネズワノワ	127	46	0.36
分身	122	9	0.07	小英雄	29	4	0.14
9通の手紙	11	0	0	叔父の夢	104	26	0.25
プロハルチン氏	25	0	0	ステパンチコヴォ村とその住人	135	58	0.40
女主人	14	14	0.24	虐げられた人々	275	157	0.57
ボルズニコフ	12	6	0.5	死の家の記録	229	71	0.31
弱い心	34	4	0.12	忌まわしい話	42	6	0.14
他人の妻とベッドの下の夫	34	5	0.15	冬記夏象	54	23	0.43
正直な泥棒	14	0	0	地下室の手記	71	52	0.87
クリスマスツリーと結婚	8	1	0.13	クロコダイル	29	5	0.17
白夜	31	5	0.16	罪と罰	422	252	0.60

イタリックは原則として本文に用いられたものを数え、副題やエピグラフ、詩の引用や手紙の署名などのイタリックは含んでいない（『貧しき人々』や『分身』『九通の手紙の小説』など）。『分身』は決定稿による。初稿のイタリックは9カ所。なお頁は30巻本アカデミヤ判ドストエフスキイ全集の頁数を示し、1頁あたりの使用率は小数第3位を四捨五入した。

- (10) 手紙にはイタリックが16カ所と頻出するが、大げさなイタリックの多用はこの恋人の未熟さを暗に示すか。
- (11) たとえばフォマの《 Я же, прощаясь с вами навеки, хотел бы вам сказать несколько последних слов...》(3-136)という言葉のイタリックや、語り手の《 Горе полковнику, если он не умеет понять этих слез! 》(3-10)のイタリックなど。
- (12) この点については下記を参照。
R.F.Miller. Dostoevsky and The Idiot. Cambridge, Massachusetts., 1981. p.8.
- (13) たとえば老婆殺しにまつわる語への執拗なイタリックはその一例。
- (14) Ph.Hamon. Un discours contraint. 《 Littérature et réalité 》. Paris., 1982. p.150.
- (15) М.Бахтин. Проблемы поэтики Достоевского. М., 1979. с.219.
- (16) М.Павчин. 『マルクス主義と言語哲学』. 桑野隆訳. 改訳版. 1989. pp.200-201.
- (17) たとえば『虐げられた人々』では、ワルコフスキイ公爵やイフメーネフ家、カテリーナ・フョードロヴナの家を暗に示す代名詞のイタリックがしばしば使われている(3-227~8,441)。
- (18) この点については、1864年3月26日付の兄ミハイル宛の手紙を参照(2802-73)。
- (19) また同じ一人称の語りの形式をとった『未成年』との対比でいえば、『罪と罰』のイタリックは『未成年』のエピローグにおかれたH. セミョーノヴィチの手紙のように、物語に一定の枠づけを行なう役割をはたしているといえようか。
- (20) 『白痴』のこのような特徴については下記を参照。
R.F.Miller. The Role of The Reader in The Idiot. 《Critical Essays on Dostoevsky》 (ed.by R.F.Miller). Boston., 1986.